21世紀への林業

魅力ある林業をめざして

森林は、木材を生産するばかりでなく、県土の保全や水資源のかん養、レクリエーションの場の提供など様々な機能を持っています。しかし、最近は外国産材の大量輸入による木材価格の低迷、山村の過疎化に伴う林業就業者の減少あるいは高齢化が進み、森林を守り育てる役割を担う林業が大変厳しい環境にあります。今回は、そんな中で懸命に森林を守ろうとしている人たちと県の動きをリポートします。

●林業県・熊本があぶない！

本県は県土の六三％を森林が占めています。その中で、スギ、ヒノキなどの人工林は、西暦二〇〇〇年にはその多くが収穫期を迎えるとされています。一方、林業労働力の減少・高齢化は著しく、平成二年の林業就労者数は昭和四十年に比べると約五二％も減少し、五十歳以上の人が六五％を占めるに至っています。

西暦二〇〇〇年まであとわずか。若い人が喜んで従事できるような〝魅力ある林業〟づくりが急務です。

今回は仲間で助け合いながら意欲的に林業経営に取り組んでいる「龍門林業研究グループ」と、高性能林業機械の導入や雇用条件の改善などで就労者確保に成果をあげている「㈲泉林業」を訪ねてみました。

一人の十歩より十人の一歩

龍門林業研究グループ

菊池市から北へ八キロ。手入れの行き届いたスギ・ヒノキ林が広がる龍門地区。ここに「林業研究グループ」が結成されてから二十五年。試験林を設けたり、シイタケ消費拡大運動をするなど活発な活動を行ってきました。

現在、会員は二十八人（平均年齢は三十五歳。役員は二年交替制で、固定せず民主的に運営されています。

今日は作業班の日。シイタケの菌を打つクヌギの枝を切り揃えているところ

●力も知恵も出し合って

経営の合理化という点で、昭和六十三年には〝作業班〟を作りました。お互い作業を手伝って労働力不足を解消しようという狙いです。構成はベテラン、中堅、若手の四人一組。「木材の置き方一つでも一人ひとり違う。先輩や他の人のやり方を見るだけでも勉強になります」と若手の蒲地昭博さん。

グループのもう一つの特徴は、作業班での労賃が個人に支払われるのではなくグループに納められるという点です。林道の整備など、市からの依頼で全員参加する労賃も同様です。これらの資金で小型運材車や枝打ちロボットなどを購入しました。会員への貸し出し料は一日二千円。共同で利用しフル回転した方が効率的というわけです。

●妻たちもゲンキ・ゲンキ

「機械の扱いは父ちゃんよか上手」と言われる坂口もとえさんは元保母さん。「実家が林業だから絶対林家には嫁がんと言ってたけどー」と小川さとみさん。でも、みんな口をそろえて「夫婦で一緒に仕事をするのが楽しい」と。同グループは妻たちの活動も盛んです。年三回の会議を開き、シイタケの直売会をしたり、林業機械の講習会などに積極的に参加しています。昨年は東京で開かれた全国林業婦人グループリーダー研修会にも参加。「乗り気だったのは夫たちの方。女性軍にも勉強してもらいたいから」と小川智英さん。

ハウス栽培により1年中収穫ができるようになりました。
空輸で東京に出荷される生シイタケ

定例会は月一回。会場は各家庭の持ち回りで、夫婦同伴で参加します。夫人たちの手料理で話が弾みます。子どもたちもお父さんの膝の上で山の様子や林業の話を聞いています。それは明日の林業の後継者たちです。

集材機を操る。一山終える頃にはすっかりベテランに